

- 599-605.
- 6) Koffler, R., A.G. Decotiis, and P.K. Rao, 1973: A procedure for estimating cloud amount and height from satellite infrared radiation data.
- 7) 島田健司, 橋本昇三, 1979: 静止衛星ひまわりの赤外デジタルデータによる台風中心の推定について, 気象学会予稿集.
- 8) Paul, A. D. *et al.*, 1974: Infrared emissivities and upper-tropospheric cloud motions, SRI Project ERU-2014, Stanford Research Institute, 7-10.
- 9) 中村健次, 杉本清秋, 1979: VISSR 輝度分布の出力プログラムとその利用について, 測候時報(続刊).
- 10) 原田知幸 他, 1979: 静止気象衛星ひまわりによる1979年4月の紀伊半島沖冷水塊について, 気象学会予稿集.
- 11) Griffith, C.G. *et al.*, 1978: Rain Estimation from Geosynchronous Satellite Imagery-Visible and Infrared Studies, *J. of Appl. Met.*, 17, No. 8.
- 12) 村松照男, 1979: GMS, レーダ, アメダスシステムによるスコールラインとたつ巻の解析—1978. 2.28, 東京のたつ巻に関連して—, *天気*, 26, 399-411.



塩谷正雄 著

強風の性質

——構造物の耐風設計に関連して——

開発社, 1979, A 5 版, 193頁, 2,500円

近年の技術の進歩に伴って構造物の規模が大きくなり, 非常に丈の高いものが作られるようになって来た。そのため構造物の設計に際して考慮しなければならない自然力として, 風力の重要性が次第に増大し, ある場合には地震力以上に支配的になる場合さえ生じるようになって来た。このような事情を反映して風工学 (Wind Engineering) と呼ばれる分野が近年次第に確立されようとしている。そして, そのような事情を反映して関連した本が近年相次いで出版された。それらは, 岡内他著, 耐風構造 (丸善, 1977), 石崎著, 耐風構造 (朝倉, 1977) および本書である。前二者は主に構造学の立場から書かれており, 気象学に関連した内容は少なく, 強風の性質に関する記述は本書が最も充実している。

本書の著者は, 鉄道技術研究所および日大, 生産工学部において一貫して気象学と工学の境界領域において気

象学的立場から仕事を進めてきた中心的研究者であり, 本書はその研究成果の要約編とも言えるものである。従って, 著者が行って来た研究に関連した分野に重点が置かれており, 風の鉛直分布, 強風の乱流, ガストファクター (突風率: 最大瞬間風速と平均風速の比で, 平均風速から最大瞬間風速を推測するのに用いられる), 風と地形, 最大風速の推定などの内容について専門的な解説がなされており, 強風の性質に関する研究の現在の最先端の知識が要領よく説明されている。風の力学的性質, 風の計測法, 風の観測値の解析法などに紙面を充分割く余裕がなかったと思われる点もあるので, これで風についてすべてのことを基本から勉強しようとする人々にとっては不満足な点があるが, 日本語で書かれた世界の先端的研究を紹介した本としては立派である。引用文献には一般の気象学の研究者には入手困難なものが多く, 入手方法などの説明があった方が良いでしょうにも思われるが, 比較的正確に引用されているので問題は少ないであろう。

(光田 寧)